

東大現代文解説

Anchor

平成26年度 第一問

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
平成26年度 第1問	7
解答例	7
本文解説.....	7
設問解説.....	8
設問（一）	8
設問（二）	12
設問（三）	15
設問（四）	19
設問（五）	23
最後に	29
引用文献・著作権表示.....	31

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければならないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければならないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

平成26年度 第1問

—— 藤山直樹『落語の国の精神分析』 ——

解答例

設問（一）	精神分析家も落語家も、独力で成果を出すことが求められ、その成果の責任もまた残酷にも全て自身で引き受けなければならないということ。（63字）
設問（二）	落語家の中には複数の登場人物の独立した人格が同居しており、かつ、その複数の他者を演じ分けるということ。（65字）
設問（三）	本来人間は各々自律的な複数の自己に分裂しているが、それらの相互交流の中で、事後的に統一的な自己の存在が作り上げられるということ。（64字）
設問（四）	落語家と同様、精神分析家も、自己内部における分裂を経験するが、その一方で自分を外から眺めるという次元でも分裂するということ。（63字）
設問（五）	落語の観客が演者の中に同居する登場人物の諸人格の対話を楽しむのと同様、精神分析においては、自身の中で無意識に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に説明する分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出すから。（117字）

本文解説

この文章は典型的な二次元型の論説文だと言えるだろう（「二次元型」とは何かについては虎の巻を参照して欲しい）。全体を通じて「落語」と「精神分析」が並列して説明され、様々な視点からその二つの類似点が述べられている。その視点となるテーマは主に「分裂」についてである。縦軸にテーマ、横軸に落語と精神分析

（とその共通の記述）を取って、表形式で本文の引用をまとめてみた。これを読めば全体像が掴めるだろう。あとは各設問ごとに詳細な内容を解説したい。

項目	落語・精神分析 共通の記述	落語	精神分析
圧倒的な孤独① 独力性	【第3段落】 「多くの観衆の前でたくさんの期待の視線にさらされる落語家の孤独。たったひとりの患者の前でその人生を賭けた期待にさらされる分析家の孤独。[中略]彼らは自分をゆするほど大きなものの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求されている。」	【第1段落】 「落語家は金を払って『楽しませてもらおう』とわざわざやってきた客に対して、たった一人で対峙する」 「落語家には共演者もいないし、みんな同じ古典の根多を話しているので作家のせいにもできず、演出家もない」	【第2段落】 「分析家も毎日自分を訪れる患者の期待に一人で対するしかない。そこには誰もおらず、患者と分析家だけである。」
圧倒的な孤独② 結果の残酷性 プレッシャー		【第1段落】 「反応はほとんどその場の笑いでキャッチできる。残酷なまでに結果が演者自身にはねかえってくる。」	【第2段落】 「(患者は)社会では1人前かそれ以上に機能しているのだが、パーソナルな人生に深い苦悩や不毛や空虚を抱えている人たちである。こういう人たちに子供だましは通用しない。単なる愚めや勘ましは帰って事態をこじらす。そうした中で分析家はひとりきりで患者と向き合うのである。」
他者を相手にしている	【第4段落】 「そうした内側の文化がそのまま通用することは、落語でも精神分析でもありえない。」 「観客と患者という他者を相手にしているからだ。」	【第4段落】 「根多を覚えた通りにやっても落語にはならない」	【第4段落】 「理論の教える通りに解釈をしても精神分析にはならない」
自己分裂	【第7段落】 「自己の中に自律的に作動する複数の自己があって、それらの対話と交流のなかにひとまとまりの『私』というある種の錯覚が生成される」	① 【第5段落】（離見の見） 「自分が発するくすぐりを今日の前にいる観客の視点から見ると作業を不断に繰り返す必要がある。」 「いったん今日の観客になって、演じる自分を見る必要がある。完全に異質な自分と自分との対話が必要なのである。」 ② 【第6段落】（複数の登場人物の自己への内在化） 「落語はひとり芝居である。演者は根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する。[中略]おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物たちがそこに現れなければならない。[中略]落語家の自己は互いに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する。」	① 【第9段落】 「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点からみることができる生きた人間としての分析家自身」 ② 【第8段落】 「患者のこのころの世界が精神分析状況のなかに具体的に姿を現し、分析家は患者の自己の複数の部分に同時になってしまい、その自己は分裂する。」
自己分裂する様を享受する	—	【第7段落】 「そうした分裂を楽しんで演じている落語家を見る楽しみが。落語というものを見る喜びの中枢にあるのだと思う。」 「落語はひとり芝居である。演者は根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する。[中略]おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物たちがそこに現れなければならない。[中略]落語家の自己は互いに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する。」	【第9段落】 「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点からみることができる生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてみえるのだろう。」

設問解説

設問（一）

問題	「このころを凍らせるような孤独」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	精神分析家も落語家も、独力で成果を出すことが求められ、その成果の責任もまた残酷にも全て自身で引き受けなければならないということ。（63字）
	構成フェーズ
	・ この問いについてどのように答えればいいのか？
	読解フェーズ
思考の目次	・ 「この」が指す内容は何か？
	・ 「このころを凍らせるような孤独」の性質は何か？
	表現フェーズ
	・ 「このころを凍らせる」という比喻について考えよう。

構成フェーズ

本問は「このころを凍らせるような孤独」とは「どういうことか？」と問うてきている。「どういうことか？」と聞かれているのだから、「このころを凍らせるような孤独」というものを本文に照らして筆者の言わんとする内容を捉えて、より説明的な形で書けばいいだろう。つまり、「この」は一体何を指しているのか、そして「ころを凍らせるような」とは一体どういうことなのかを本文で筆者が主張していることを踏まえた上で説明すればよい。つまり、このが指す内容を確定した上で、「ころを凍らせるような孤独」がどういうことかを書けばいい。

読解フェーズ

「この」が指す内容は何か？まず、「この」という指示語が指すものを確認したい。「この」であるからには直前を見れば良いので、指されている内容は「彼らは自分を揺すぶるほど大きなものの前で～客が来なくなる。患者が来なくなる。」の部分であることがわかる。この文章は最初の二つの形式段落で詳しく述べられていた「圧倒的な孤独」についてのまとめの文章である。ということはつまり、この設問もまた、最初の二つの形式段落で詳しく述べられていた「圧倒的な孤独」についてまとめれば良いということになる。この「圧倒的」という表現が、ちょうど傍線部の「ころを凍らせるような孤独」と対応している。答案の構成は「落語家も精神分析家も『圧倒的な孤独』の中にあるということ。」で決まりだ。

「圧倒的な孤独」とはどういうことか。

筆者は落語家と精神分析家の孤独について一人で観客や患者に向き合わなければならない孤独と結果を他人のせいにできず全て自分が引き受けなければならない孤独という二つの点から類比している。この二つの孤独が「ころを凍らせる」。誰もあてにできない、だからこそ誰のせいにもできない、あらゆる点で一人であることを強要される落語家の仕事と分析家の仕事。「自分を揺すぶるほど大きなものの前でたった一人で事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求され」そしてそれに失敗することは「自分の人生を脅かす」ことを意味するのである。こうした孤独の感覚がころを凍らせてしまうかのように感じる。

ここで凍るという言葉のニュアンスを考えてさらに一步踏み込んで行こう。凍るとは物事が動かなくなることを意味する。ころを凍らせるような孤独とは、その圧倒的な孤独ゆえにころが動かなくなる。つまり、圧倒的な孤独の前に押しつぶされ、極度の緊張の中で、ころが張り詰めてしまい、身動きが取れなくなってしまう。圧倒的な孤独に対処できなかった時のことを考えるとぞっとしてしまう。そ

してもし失敗してしまったら、確実に自分の人生が脅かされる。失職するかもしれないという不安だ。

まとめると、独力で患者や観衆に向きわなければならないこと、そして演技や診断を失敗したら確実に人生が脅かされるという不安という二点を書けばいい。

コラム：比喻について

比喻とは、感覚的に分かりやすいイメージを用いることで、論理的にだけではなく読み手の感情やイメージに訴えかけることで、効果的に意味の伝達を図りたい時に使うことが多い。

アリストテレスは、メタファー（隠喩と訳す場合が多い）を幾つかの役割に分類する。まず、謎解きである。あえて直接的な言い方を避けて謎めかすことで、その謎が解けたときに人々は快を感じるんだと述べている。

次に先ほど述べたような効果的に意味を伝えること、そして文章のあるいは言語の新たな地平を築くことでもある。

これは、新しい表現をすることの斬新さである。新たな表現を獲得することによって人間の認知は新たな地平を切り開くこともある。今まで意識にのぼっていなかったものが昇るようになる。今まで結びつかなかったことが結びつくようになる。メタファーはこのような役割があったりするのだ。

メタファーには特別注意してそれが表そうとしていることをじっくり考えて、謎を解く時間があってもいいかもしれない。

他社解答例の講評の講評

A社

答案

落語家も分析家もたった一人で観衆や患者の期待にさらされ、成果を出さなければ自分の人生が脅かされてしまうこと。（54字）

Schip採点 5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

回答に必要な要素が過不足なく含まれているとともに、一読して読みやすい優れた答案だ。

B社

答案	落語家も分析家も、失敗すれば自分の人生を揺るがしかねないほどの他者の大きな期待に、ひとりで向き合い成果を出せねばならないこと。(63字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案もまた、必要な要素を盛り込みつつ、読みやすい回答になっている。

C社

答案	落語家も分析家も、文化を内在化し自己の存在を賭けて、相手の期待に応えようとただ一人で他者と対峙するしかないということ。(59字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「文化を内在化し自己の存在を賭けて」という文章がよくわからない。よって表現点の加点はない。また、この答案に必要な要素は、独力でという点と人生を揺るがしかねない結果も引き受ける必要があるという二つの点が必要だが、この回答は一つしか書かれていない。よって読解点さらには関連して構成点を減点した。

D社

答案	反応の予想できない他者の目にさらされ、その期待にこたえる責任をただ一人で引き受けることが自己の存在理由となっているということ。(63字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「自己の存在理由となっているということ」と結んでしまっはすべてがダメであろう。「心を凍らせるような孤独」とはどういうことか？と問題は聞いているのである。存在理由とは、自分が「いま・ここ」に存在していることの原因あるいは根拠である。心を凍らせるような孤独は、自己の存在理由なのだろうか？この問いは聞かれていることに答えていないことは明らかである。

E社

答案	落語家と分析家に共通する、大きな期待を抱いて対価を支払う人にただ一人で対峙して成果を要求され、もし失敗すれば自己の人生を確実に脅かされる状況のもたらす思い。(78字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：-1点

回答に含めるべき要素は盛り込んではあるものの、多少の読みにくさがある。一読してわかりにくいような答案は避けたほうが無難だろう。

答案	落語家も分析家も、他者の期待にこたえられなければ自分の存在意義が問われる過酷な関係性の場に、ただ一人で向き合わなければならないこと。(66字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

存在意義が問われるというのは言い過ぎだろう。「人生を脅かされる」とは言っているが、それは職業的な問題であり、存在意義までが脅かされるとまで言ってしまったら言い過ぎである。存在意義とは、「自分が存在していることの意味」程度に理解していいだろう。確かに、職業的なアイデンティティが個人の存在意義に関わっている人もいるだろう。しかし、筆者が分析家という職業に個人的なアイデンティティまでかけているとまでは読み取ることができない。よってこの回答は言い過ぎである。そのため読解点は減点した。

設問（二）

問題	「落語家の自己は互いに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	落語家の中には複数の登場人物の独立した人格が同居しており、かつ、その複数の他者を演じ分けるということ。(65字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 傍線部は、どのように分解できるか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？ ・ 「落語家の自己」が「他者性を帯びた何人もの他者」によって「占められる」とは、どういうことか？ ・ 「落語家の自己」が「分裂する」とは、どういうことか？ <p>表現フェーズ</p>

構成フェーズ

傍線部自体が、普通に意味の通った文章であるので、回答として求められるのは、それぞれの要素を詳しく言い換えることだと言えよう。よって、構成は傍線部を元にすれば良い。言い換えるべき要素は以下だ。

- ・ 「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？
- ・ 「落語家の自己」が「他者性を帯びた何人もの他者」によって「占められる」とは、どういうことか？
- ・ 「落語家の自己」が「分裂する」とは、どういうことか？

読解フェーズ

「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？要素の中で若干わかりづらいのは、「他者性を帯びた何人もの他者」の箇所だろうか？「他者なんだから他者性を帯びているに決まっているだろ！」というツッコミが入りそうだが、我慢してみよう。傍線部の直前の文章で「この他者性を演者が～」と書いてある。よって、指示語をたどり、この「この」が指す先も見てみよう。そこには「おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物(登場人物)たちがそこに現れなければならない」とある。つまり、この「他者性を帯びた」とは、たがいに別の人格を持った他者同士であるということを強調している表現なのだということがわかるだろう。落語家の中に“他者たち”は一緒に存在しているが、それらの人格は相互に独立でなければいけない（ということを手早く落語家は表現しなければいけない）ということだ。つまり、落語家の中には独立した複数の他者が同居しているのだ。これが、「他者性を帯びた何人もの他者」によって占められるということの意味である。では、「分裂する」とはどういうことだろうか。落語家は、自分のうちに複数の他者を同居させている。しかしそのことだけでは、落語はできない。その同居した複数の他者を、演じ分けなければ落語は成立しないのである。つまり、うちにいる複数の他者を、声色を変えたり、仕草を変えたりすることによって、観客の目にもわかるように演じ分けることによって、落語は成立するということである。ここまでまとめれば、回答は完成である。

他社解答例の講評の講評

A社

答案

落語家はお互いの意図を知らない複数の登場人物を演じ分けて、それぞれの人物をリアルに現れさせるということ。(52字)

Schip採点	4点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：1点
---------	----	--------	--------	--------

「占められ」という点を書いていないために読解点を一点減点したが、よくできている回答である。

B社

答案	落語家は根多を話者の視点で語るのではなく、互いの意図を知らない複数の登場人物に瞬間瞬間に同一化し演じ分けるということ。 (59字)
----	--

Schip採点	4点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：1点
---------	----	--------	--------	--------

A社と同様に、「占められ」という点が出ていないために、一点減点した。

C社

答案	落語家は演じる自分を観客という他者の視点から対象化した上で、互いに自律した複数の他者の生きた対話を演じるということ。(58字)
----	---

Schip採点	4点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：1点
---------	----	--------	--------	--------

前半の要素がここで必要かは疑問である。間違いではないが、「占められ」という点を書いた方がよかっただろう。よって読解点を減点した。

D社

答案	臨場感をもって根多を演じる落語家は、語り手としての自己を消去し、互いに意図を知らない登場人物の各々にそのつど成りきって生きること。(68字)
----	--

Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

語り手としての自己を消去しているのだろうか疑問である。「落語家は講談のように話者としての視点で語るのではなく」とは言っているが、それを「語り手としての自己を消去している」と捉えるには論理の飛躍がある。よってここでは、言い過ぎである。そのため読解点を減点した。

E社

答案	ひとり芝居を行う落語家の内部では、彼が瞬間瞬間に同一化するネタのなかの登場人物が、互いに互いの意図を知らない複数の他者として現れているということ。(73字)
----	--

Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

内部の複数の他者が、演じ分けることによって、外部にも現れてくるということが、「占められ、分裂する」ということの意味である。そのために、この回答は読解点を一点減点した。

F社

答案	落語家は、観客という他者の視点から自己を客観視した上で、落語に登場する相互に独立した複数の他者全てに同一化しつつ一人で演じる存在であること。(70字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「観客という他者の視点から自己を客観視した上で」というのはこの回答においては、余計なものなのではないかと思う。確かに落語家は観客という他者の視点から自己を客観視しているという趣旨の説明はなされている。しかしそれは、異なる次元の分裂であると説明されている。ここではその次元の分裂について述べる問ではないので、この要素は余計であろう。そのために読解点を減点した。また、設問は、「～占められ、分裂する」とはどういうことかと聞いてきているので、「落語家は～存在であること」という回答は適当でないと考えた。そこで、構成点も一点減点とした。

設問（三）

問題	「ひとまとまりの「私」というある種の錯覚」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	本来人間は各々自律的な複数の自己に分裂しているが、それらの相互交流の中で、事後的に統一的な自己の存在が作り上げられるということ。(64字)
思考の目次	構成フェーズ
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 回答の構成を考えよう。
	読解フェーズ
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「私」とかっこでくくられている意味を考えよう。 ・ 錯覚とは具体的にはどういうことだろうか？
	表現フェーズ
	<ul style="list-style-type: none"> ・ ひとまとまりの「私」を言い換えるとどうなるだろう？

構成フェーズ

解答の構成は設問を見るだけで決まる。設問を一言で言えば、「錯覚」について詳しく説明しろということなのだから、回答は基本的には「本当はAなのに、Bであると私たち人間には感じられてしまうということ」という形になるだろう。そしてBは「ひとまとまりの『私』」であるので、回答の骨子は以下になるだろう。

「本当はAなのに、〈ひとまとまりの『私』〉であると私たち人間には感じられてしまうということ。」

読解フェーズ

まずは「ひとまとまりの『私』」という記述の意味を確認したい。ここでのポイントは、「私」が鉤括弧でくくられている点だ。筆者が「」を使うときは、その言葉を強調することを目的としている。どのように強調しているかは、文脈にもよるが、一般的な使われ方とは異なる意味で使う場合、あるいは逆に”いわゆる～”ということを表すために使われたりする。

この文章では、筆者は「人間が本質的に分裂していることが精神分析の基本的な前提だ」と言っている。しかし、「一般的」には、人間が分裂しているなどとは思われていない。筆者は精神分析ではそうは考えないと言っている。だからこそ、ここで私ではなく「私」として、読者に「一般的」な用法とは異なる意味であることを了解させている。

繰り返すが、人間の本質的なあり方は「分裂」だと筆者は述べる。そして、その分裂している、いわば一個体の人間の中に宿る複数の自己は、自律していると述べている。まるで、落語家が複数の自律的な他者を演じるように。

自律というのは、自らが自らの行動規範を設定することができるという意味である。すなわち、どれかがどれかに依存しているのではなく、それ自身として一つの体系・システムを持っているようなものである。この点もまた回答する上では重要な要素であろう。

余談になるかもしれないが、錯覚はいかにして生まれるのかについても考えていきたい。

筆者は、精神分析の前提は人間は本来的に分裂していることにあるという。その分裂は、意識と無意識、自我と超自我とエス、精神部分と非精神部分、本当の自分と偽りの自分などである。

これらは、自律的な複数の自己である。つまり、その一つ一つが「自己」でありうるのだ。人間はその複数の自己によって形成されている。それらの対話と交流の中に、「ひとまとまりの『私』というある種の錯覚が生成される」と筆者はいう。ひとまとまりの「私」は、ある意味では“作られた”概念だということである。しかしながら筆者は“作られた”概念であるからといって、否定しているわけではないことにも注意しよう。私たちは、みんな、ひとまとまりの「私」を錯覚してしまうのだ。しかしそれは事後的なものである。本来は分裂しているのだが、それらの相互交流の中で、いつの間にか「ひとまとまりの『私』」が作り上げられるのだ。おそらくこれは意識的な行為ではないだろう。そういう意味では我々はみんな錯覚してしまうのだ。そしてその錯覚を錯覚だと思えなくなってしまった状態が精神分析を受けに来る患者なのだろう。自己の本来的な分裂に気づいてしまいいながらも、ひとまとまりの「私」という錯覚からも抜け出せないで苦しんでしまう。分析家は、そうした患者の分裂のあり方に自己を同化させつつも、外部の視点からその分裂を見通す。そこで、再び自己の統一が回復されるのである。しかし今回は、錯覚ではなく、自覚的な営みとして。これが本文を読む上で基本的な図式であると言ってもいいだろう。簡単にまとめると、この文章によれば、以下の三種類の状態の人間が考えうるということである。

1. “普通”の人＝ひとまとまりの「私」があると錯覚している人。
2. 精神分析の患者＝自己の分裂に気づくも分裂した自己に振り回されて悩む人。
3. 精神分析家＝自己内部の分裂を外部の視点から相対化した上で、自律的なひとりの人間としてのあり方を回復した人。

本題にもどろろう。ここまでをまとめると回答は以下のようなものが考えられるだろう。

人間は本来的に分裂しており、複数の自律的な人格を持っている。しかし、それらの相互交流の中でひとまりの「私」は作り上げられる。

最後に、ひとまとまりの「私」を言い換えれば、回答が完成する。ひとまとまりの「私」とは、意識と無意識、自我と超自我とエス、精神部分と非精神部分、本当の自分と偽りの自分などの分裂した自己が、統一的な自己のうちに統合されているような状態のことである。その統一的な自己はあくまでも事後的なものである。なぜなら、「人間は本来的には分裂している」というのが精神分析の基本的な前提だからである。

以上をまとめると、回答例のようになる。

本来人間は各々自律的な複数の自己に分裂しているが、それらの相互交流の中で、事後的に統一的な自己の存在が作り上げられるということ。(64字)

他社解答例の講評の講評

A社

答案

人間は本来的には自律的な複数の自己より成るが、それらを総括する自我があると思っているということ。(48字)

Schip採点

読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

錯覚というニュアンスをもっと出してもよいのではないかと思う。思っていることよりも、思い込んでいるなどにした方がベターだと思われる。多少厳しいかもしれないが、そのことを考慮して構成点を一点減点した。

B社

答案

人間は本来、自律的に作動する複数の自己を内部に持つのだが、自ら統合された一つの人格を持った主体とみなしていること。(57字)

Schip採点

読解点：5点 構成点：2点 表現点：1点

この答案は参考になるだろう。よくできた回答である。

C社

答案

人間は、本質的に分裂した異質な自己の関わり合う自らの存在を、個としての統合性をもつ主体と見なして生きているということ。(59字)

Schip採点

5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案もよくできている。

D社

答案

人間は自律的に作動する複数の自己に分裂した存在だが、それらの関わり合いの総体を、統一性をもつ人格として感じることができるということ。(66字)

Schip採点

1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

錯覚とあるのだから、「本当はそうでないのにそう思っている」というような書き方が求められる。ここでは、精神分析においては「人間が本質的に分裂してる」とが前提にされていると書かれている。ということは、ここではそのことをうまく説明しなければならないが、本答案はそこが曖昧である。「本来は～」などの要素が必要であろう。また、「感じることができる」と言ってしまうのは、「感じていない」という状態も存在し得るということを含意してしまう。そうではない。この錯覚は、あくまで人間誰しも必ずそうは感じてしまうものなのだ。以上の根拠により、この回答には読解点は与えられない。

E社

答案	人間は本質的に分裂し、内部には自律的に作動する複数の自己が存在するにもかかわらず、現実世界ではそれらは統括されて自律的な一人格をなしているという思い込み（のこと）。(79or82字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：-1点

現実世界とはなんだろうか？「現実世界では」とするからには、現実世界でない何か、例えば「仮想世界」が別に想定されるべきだということなのだろうか、あるいは回答中にある「内部」が「現実世界」に対応する概念なのだろうか。いずれにせよ、本文では、現実世界やそれに対応する何かについては述べられていない。こうしたツッコミに対してこの回答は弱いのではないかと思う。そのために読解点を減点した。また、字数が多すぎるので、表現点を-1点とした。

F社

答案	人間は、本質的に複数の異質な自己の集合体でしかない自らの存在を、一貫性をも個的人格であるかのようにみなして生きるほかないということ。(66字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「生きるほかない」というのは、本文に書いていないし、それならば分析家の仕事は無意味なのではないかと思うが、「ほかない」というのは言い過ぎである上に、そのようなことは書いていない。生きるほかないとなってしまうと、これは惜しいどころではなく明確に誤答と言わざるをえないだろう。

設問（四）

問題	「精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
----	---

解答例

落語家と同様、精神分析家も、自己内部における分裂を経験するが、その一方で自分を外から眺めるという次元でも分裂するということ。(63字)

構成フェーズ

- ・ 回答の方向性を考えよう

思考の目次

読解フェーズ

- ・ 「精神分析家の仕事も～」における”も”に注目しよう。
- ・ 彩られているとはどういうことか考えてみよう。

構成フェーズ

傍線部の意味をきちんと読み取って、その趣旨に沿って具体的にどういうことを説明していけばいい。傍線部を見てみると精神分析家の仕事「も」と書いているので、精神分析かと落語家の仕事を比較していることがわかる。よって、回答の大きな方向は以下になる。

落語家と同様に精神分析家も、実は分裂に彩られているということ。

読解フェーズ

ここでは、「精神分析家の仕事も分裂に彩られている」ということが、具体的にどういうことなのかを考えていけばいい。

上記で述べたように、精神分析家の仕事“も”と書いてあるので、ここでは同様に分裂に彩られた仕事としての落語家との比較がなされているということがわかる。

では落語家の仕事がどのようなものかを考えていこう。設問(3)でも述べたように、落語は一人の人間のうちに様々な他者を取り込み、その他者同士を会話させて生き生きとしたリアリティを聴衆の前に提示する。しかし、落語家は完全に分裂しているのだろうか。いやそうではない。それは世阿弥の「離見の見」という文中の言葉からも理解できる。「演じている自分」と「それを見る自分」にも落語家は分裂しているのだ。つまり、「演じている自分」は複数の他者を演じることで分裂してい

るが、さらにその演じている自分を見ている別の次元の分裂があるということも述べている。

落語家は複数の次元で分裂しているのである。一つは複数の他者を演じているという分裂、もう一つはその演じている自分を見つめるという分裂なのである。落語家はこのように二つの次元で分裂に「彩られている」のである。

では、精神分析家はどのような分裂に彩られているのだろうか。分析家も落語家と同じ二つの次元に分裂している。

一つは、「患者の一部分になることを通して」の分裂（第四段落目一行目）である。具体的な例は本文に書いてあるのでゆっくり読んでもらいたい。しかし、そうした分裂だけでは分析家の仕事はできない。それを“離れた”視点から見て、自分の中に取り込まれた患者のことを分析しなければならないのである。（第五段落）

これは落語家の二つに次元と重なる分裂のあり方ではないだろうか？

彩りは単色ではありえない、ステーキの付け合わせも黄色と赤のパプリカが添えられていた方が彩り鮮やかである。

分析家も同様に、複数の分裂によって「彩られている」のである。

まとめると回答のようになるだろう。

落語家と同様、精神分析家も、自己内部における分裂を経験するが、その一方で自分を外から眺めるという次元でも分裂するということ。（63字）

他社解答例の講評の講評

A社

答案

分析家は患者の心に住む複数の自己に同一化しつつも、分析家の視点に戻ってその世界を理解し伝えるということ。（52字）

Schip採点 2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「分析家の視点で理解し伝える」とは誰に伝えるかを明示しなければ文章が成立していないと言ってもいいだろう。ここでは患者に伝えるということなのだろうが、傍線部は「分裂に彩られている」とあって、それについてどういうことか答えよと言われているので、患者に伝えることまで含める必要ないだろう。また落語家同様という要素はあった方がベターである。そのため構成点、読解点共に1点ずつ減点した。

B社

答案	精神分析家は精神分析の際、患者を理解するために患者の自己の複数の部分に同時になってしまうので、自己が分裂するということ。 (60字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

この答案も一つの次元の分裂しか書いていない。彩られているという言葉の持つニュアンスと文章中においても落語家の二つの次元の分裂と分析家の二つの次元の分裂が対応した形で述べられていることを考えても、二つの次元の分裂について述べたほうがいいだろう。彩りを言い換えられていない点で構成点を一点、二つの次元の分裂について触れていない点で読解点を1点ずつ減点した。

C社

答案	分析家が患者の世界を理解し助言するには、患者の分裂した複数の自己に同化し自らも分裂を体験するしかないということ。(56字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

一つの次元の分裂しか書いていないので、読解点を減点した。それに伴い、彩られているという傍線部を読み解けていないことになるので、構成点も一点減点した。

D社

答案	分析家が患者を理解するさいには、患者の分裂した複数の部分になりきりつつも、そうした事態を分析家自身の視点で把握しているということ。(65字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「精神分析家の仕事も」と傍線部にあるので、落語家という単語をどこかで用いるのが良い。そこで構成点を一点減点としたが、二つの次元の分裂を書いているため優れた答案である。

E社

答案	落語家同様分析家も、患者の精神分析状況において具現化される患者のこころの世界を構成する複数の部分に同時に同化して生じた複数の自己で内部を占められるということ。(79字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

やはり読みにくいというのがまずはじめにある。この文章は、一読して文章の構造がはっきりしない。こういう答えは読み手にとってはストレスなので、受験生のみんなは気をつけよう。難しい言葉を使う必要はない。わかりやすい文章を書くことを心がけよう。79字という長文になっていることを考えると、表現点は減点が適当だ。またこの答えは、一つの次元における分裂に関してしか言及していない。そのため読解点も減点である。

F社

答案	患者という他者になりきることでその心的世界を理解しようとする精神分析家は、患者の自己の複数性に同化して自らも分裂した存在となること。(66字)			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

これもまた一次元の分裂しか書いていない。読解点が0点なのは、落語家についての言及がないことと、一次元の分裂しか書いていないからである。

設問（五）

問題	「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいる」（傍線部オ）とあるが、なぜそういえるのか、落語家との共通性にふれながら一〇〇字以上一二〇文字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。
解答例	落語の観客が演者の中に同居する登場人物の諸人格の対話を楽しむのと同様、精神分析においては、自身の中で無意識に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に説明する分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出すから。 (117字)

構成フェーズ

- ・ 落語家との共通性にふれながらという点に注意しよう
- ・ なぜそう言えるのかとあるので理由を答えよう

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 生きた人間としての分析家のあり方とは？
- ・ そうしたあり方はどのような点で落語家と共通しているのだろうか？
- ・ 患者に希望を与えているとはどういうことか？

構成フェーズ

落語家との共通性にふれながらという指示があるので、落語家と精神分析家の共通する点でどこを盛り込めばいいのかを考えて文章の構成を考えていこう。

また、なぜそう言えるのかという問いかけになっている。傍線部オということが言える理由を答えていけばいい。「生きた人間としての分析家のあり方が、患者の希望を与える」と言えるのはなぜかである。そう言える根拠を書いていけば答えになるだろう。

読解フェーズ

まず「生きた人間としての分析家のあり方」とはどういうことか考えていこう。直前には「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができる」と書いてある。この言葉は手がかりにすべきであろう。「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見る」とは、あの「離見の見」の事である。これは、直前の設問(四)で回答したことと重なり合う。

では、このような精神分析家のあり方と落語家の共通性はどこにあるだろうか。落語家は昨日笑わせたそのままのネタを繰り返すのではなく、常に観客側からの視線で演じている自分を見つめ、自らで自らを評価する（第五段落）。それは自分と自分の対話なのである。ここに一つ目の「生きた」という側面が現れる。分析家も同様に、自らを別の視点で見ることによって自らと対話を行う。

問4でも述べたように、落語家と分析家の分裂はそれだけではない。両者ともに、演じている-分析している内部においても分裂しているのであった。筆者は落語を見る楽しみの中核にあるのは、「分裂を楽しんでいる落語家を見る」ことだと述べる（第七段落）。本文にはこうある。「落語を観る観客はそうした自分自身の本来的な分裂を、生き生きとした形で外から眺めて楽しむことができるのである。」

落語家は複数の自律的な他者を演じ分け、機転のきいた会話を展開していく。まるで、自分のなかに複数の他者を持ち、その他者たちが会話を楽しんでいるように演じるのだ。このことを筆者は「生きた対話の運動の心地よさ」（第六段落）とも言っている。この次元でも「生きた」という側面が表れているのである。まとめると、演じている自分とそれを客観的に見ている自分の「生きた対話」と演じている自分の中での複数の自律的な他者との「生きた対話」の二つの側面が「生きた人間」を構成している。

では、そうしたあり方が「患者に希望を与え」るのは何故なのか？

第七段落を読んでほしい。そこにはこう書かれている。「分裂しながらも、ひとりの落語家として生きてい る人間を見ることに、何か希望のようなものを体験するのである。」

人間の本来的なあり方は分裂的だというのが筆者の考えである。一方で精神分析の患者は分裂的なあり方に悩んでいる。彼ら/彼女らは分析家の患者理解の言葉や物語や解釈に癒されもする。しかし、傍線部オで筆者は、そうした治療を行う分析家の姿自身も患者にとっては希望となると述べるのである。

落語家が人間の本来的な分裂を演じる。しかし、それは無自覚に行われるものではなく、自分を引いた目で見つめる自覚的な営みとして行っているのである。そしてそうした落語家のあり方に「希望のようなものを体験」するのである。

最後の二行にはこう書かれている。「自分はこころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされていなくてもいいのかもしれない。ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれないのだ」と。つまり、患者はこころの中の誰かに無自覚に振り回され、突き動かされている。それを統御できないがゆえに、悩み、苦しむ。しかしながら、自分のそうした分裂（何度も言うがこれが人間の本来的なあり方であると筆者は述べている）を分析家は自分のうちに引き受けつつも、そこから離れた視点を取り、一つの自律的な人間の下で分析してみせる。そうした本来的な生き生きとした分裂を、「ひとりのパーソナルな欲望と思考を持つ人間」のもとで律することができている分析家のあり方を見て、患者は自分もそうできるのではないかという「希望のようなもの」を感じる。

患者は、自覚的に分裂する他者と生き生き対話し、それをひとりの人間の自律の下に行える分析家に希望を持つのである。

まとめよう。人間は本来的には分裂している。しかし、多くの人はその分裂を錯覚によって、経験しないで済む。精神分析を受診に来る患者は、本来的な分裂を経験し、その上で自らを統御できない状態にある。

精神分析家は、その患者の分裂に同化しつつも、それを引いた目で見ることによって、自らのうちにある分裂した複数の自己-他者に振り回されないことができる。

落語家もまた、複数の分裂した他者を演じながらも、離見の見をもっていして自覚的に行い、対話を楽しむ。この落語家のあり方は、精神分析家と重なるものがあると筆者は述べる。

こうした精神分析家のあり方に、患者は、自らの本来的な分裂を経験してもなお、それを自律的に統一できるということを感じて、希望を感じるのである。

これで回答の骨格は全て整っただろう。まとめて120字以内で説明すれば終了だ。

他社解答例の講評

[第5問採点基準 最大10点]

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
なぜそういえるのか（構成点）	設問で聞かれていることに答えているか？ なぜそう言えるかの、理由を書いた文章になっている。	文章全体。特に文末表現。～から。	0～2点
落語家との共通性（読解点）	落語と精神分析の共通点が書かれているか。	落語の観客が、演者の中に同居する複数の他者同士の対話を楽しむのと同様	0～2点
生きた人間としての分析家自身のあり方こそ（読解点）	生きた人間としての分析家のあり方がどのようなものか書かれている。	一つの人格に統合された人間	0～2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
患者に希望を与えてもいる（読解点）	精神分析の患者が抱く、希望がどのような点にあるかが書かれている。	勝手に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に見ることができる分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出す	0～2点
表現点	読みやすい文章になっているか		0～2点

A社

答案	<p>複数の登場人物に自己を分裂させつつそれを楽しんで演じる落語家の姿が観衆を楽しませるように、患者の分裂した心の世界に同一化しつつも自身の視点に立ち戻る分析家のあり方が、分裂した自己に支配されない自律的な存在になる可能性を患者に見出させるから。 (120字)</p>		
Schip採点	10点	読解点：6点	構成点：2点 表現点：2点

全ての要素が含まれており、非常にわかりやすい文章も書けている。満点答案ではないだろうか。

B社

答案	<p>分裂しながらもひとりの落語家として生きている自らの姿を観客の視点から見る落語家のように、患者の分裂に同化し分裂しつつも自分を別の視点から見られる分析家のあり方が、分裂した自分でもひとりの自律的な存在として生きられる可能性を患者に示すから。 (119字)</p>		
Schip採点	8点	読解点：4点	構成点：2点 表現点：2点

この文章の主題は、あくまで分裂する落語家/分析家を見る観客/患者の側であるべきなので、「分裂しながらもひとりの落語家として生きている自らの姿を観客の視点から見る落語家のように」としてしまうと、主題が落語の演者の方に移ってしまっていて、後半との対応関係がばやけてしまう。落語家のそのようなあり方が観客を楽しませているのだということには最低限言及したほうがいいだろう。よって読解点を2点減点とした。

C社

答案	精神分析家は落語家と同様に、文化を内在化してただ一人で他者と対峙し、自己分裂する自分を他者の視点から対象化して語る存在であり、分裂した自己に苦しむ患者は、分裂してもなお分析家として仕事を行う姿に、自律的に生きる回復への可能性を感じとるから。 (120字)
Schip採点	6点 読解点：2点 構成点：4点 表現点：0点

「落語家と同様に、文化を内在化してただ一人で他者と対峙し」という点がよくわからない。そのため表現点は0点とした。「落語家と同様に」の点が十分でないため落語家との共通性の読解点は一点減点した。「分裂してもなお分析家として仕事を行う姿に」は「生きた人間としての希望」とは対応関係が微妙であるためここも一点減点した。

D社

答案	落語家が、一人の人が様々な人物に分裂しているさまを見せることで観客を楽しませるように、分析家は、分裂した自己に苦しむ患者に対して、患者の分裂を体現しつつそれを見渡す視点を持つ生き方を一人で引き受け、そのさまを患者自身の可能性として示すから。 (120字)
Schip採点	10点 読解点：6点 構成点：2点 表現点：2点

この答案も必要な要素が盛り込まれているとともに、文章も主語述語の対応関係や比較も上手く書けていて、素晴らしい答案だ。

E社

答案	自己を分裂させつつ一人の人間として生きる落語家を見て観客が楽しむのと同様、複数の自己に分裂した患者内部と同化して生じた分裂を克服し、自身の視点を回復した分析家を見て患者も、自己を対象化し、自律的な存在として統一性を持つ自己を見出しうるから。 (120字)
Schip採点	8点 読解点：4点 構成点：2点 表現点：2点

「自己を分裂させつつ一人の人間として生きる落語家を見て観客が楽しむのと同様に」としている点がよい。前半をこのような文章にすることによって、後半の精神分析家との対応関係がはっきりする。ただし、分裂した患者内部と同化して生じた分裂を「克服」したとまでは読み解けない。なぜなら精神分析の基本的な前提は、「人間は本来的に分裂している」ということなのだから。分裂しつつも、それを客

観化あるいは対象化できるという点がポイントである。よって読解点は2点減点とする。

F社

答案	文化を内在し複数の他者を一人で演じる落語家のように、自己の分裂に苦しむ患者に同化して自らも分裂しつつそれを別の視点から対象化し理解する分析家のあり方は、複数の自己を仮想的に統合しつつ自律的な個として生きる人間存在の本質を患者に示唆するから。 (120字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：点

「文化を内在し」という言葉が不明確で不明瞭であって、これは傍線部を説明するのに、回答で使われている語句もまた説明しないければ理解してもらえないという設問者へ問いを投げ返しているような回答になっている。設問者への問い返しは、うまく決まればかっこいいかもしれないが、そのようなことはよっぽど自信がない限りやめたほうがいい。また、「複数の自己～生きる人間存在の本質」というのは言い過ぎである。複数の自己を仮想的に統合しつつ自律的な個人として生きることが人間存在の本質だと述べている箇所を文章中から探すことはできない。むしろ本文では人間の本質は分裂していることだと述べられているに留まる。

文化を内在し～という記述が意味不明なので、読解点2点減点かつ表現点も加点できない。「自己の分裂に苦しむ患者に同化してい～分析家のあり方」は正しい。しかし、その次の記述が誤っているので、さらに読解点を減点とした。

※他社解答例の採点結果（最高点は32点：漢字書き取りは除く）

	A社	B社	C社	D社	E社
設問1	5点	5点	2点	0点	3点
設問2	4点	4点	4点	3点	3点
設問3	0点	0点	5点	1点	2点
設問4	2点	2点	3点	3点	1点
設問5	10点	8点	6点	10点	8点
合計	21点	19点	20点	17点	17点
得点率(%)	66%	59%	63%	53%	53%

最後に

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。回答は常に暫定的なものである。大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそその一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を案内としつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

その際には、議論することも大事である。議論することによって、このような解釈もありうるのではないか、これはこう読むのがだろうなのではないかというように、テキストの多様な側面が見えてくる。自分では思いもよらなかった解釈に出会うこともある。現代文の回答を議論することはあまりないかもしれないが、これはかなり学びになる。そして何よりも楽しい。是非一度、自分の回答をみんなで議論してみてほしい。学ぶこと、頭を使うことで最も重要なことは楽しむことである。勉強は楽しみながらするのが一番である。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから、我々の回答も疑いつつ、さらによい答案を皆さんが書いてくれることを楽しみにしている。もし自信のある答案がかけたならばぜひ教えてほしい。

このAnchorが皆さんのフィードバックによって、より良いものに更新されて行くことを期待して、終わりとする。

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社の解答例講評欄に記載されている解答例は以下の出典より引用しております。

- ・ 『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』 教学社編集部・編 2016年
- ・ 『難関校過去問シリーズ 東大の現代文25カ年〔第8版〕』 桑原聡・編著 2016年
- ・ 『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学〔文科〕 前期日程(上) 2016～2012/5か年』 駿台予備学校・編 2016年
- ・ 河合塾（総合教育機関・予備校） / 2014年度国公立大二次試験・私立大入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/14/t01.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 大学入試問題過去問データベース produced by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 東京大学 教育学部の無料受験過去問/入試問題集【スタディサプリー】 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/000000000000132501>（閲覧日：2017年2月18日）